

Q1 駅名「吉見ノ里」に「ノ」があるのに、「井原里」に「ノ」がないのは何故？

A1：なぜ、カタカナ混じりなのかについては、講座の中で「戦前は、公用文などは漢字とカタカナ混じりで表記。その名残り」と説明しました。

ご質問の「井原里駅」のように、逆に「ノ」の表記がない駅は他にも「二色浜駅」がありますね。

ただ、南海電気鉄道(株)のHPを見てもその答えは見つからず、また、同社への問い合わせも、諸々の条件があり、調査の限界を感じました。

よって、私見になりますが、「吉見ノ里駅」は大正4年の開業で、「井原里駅」は昭和27年の開業とされていることから、丁度この間に、公用文などの表記方法が変わったことが関係しているように思われます。

Q 2 「明朝体」とは、(中国) 明の時代にできたということかと思いますが、
文字はもっと古くからあったのに、なぜ「明朝」なのでしょうか？

A 2 : 明朝体は、明王朝の時代から清王朝の時代にかけて、印刷用の字体として開発され、成立したとされています。特に清代に入り康熙帝勅撰の「康熙字典」は明朝体で刷られ、後に明朝体の字体の見本とされたため、広く印刷物で活用されることになりました。

この明朝体ができる前は、楷書体で木版印刷されたようですが、楷書体は曲線が多く、彫るのに時間がかかるため、北宋時代からの印刷技術の発達とともに、この明朝体が開発されたようです。

一方、文字は、3000年以上前に殷王朝のときに作られ、長い年月をかけて、徐々に形を変えながら、より早く書けるよう、合理的な楷書体や行書体が作られました。それまでは、手で書く書体でありましたが、印刷技術の発達とともに、特に明の時代の後半頃から、印刷用の字体として明朝体を作られたという経緯になります。

なお、手書きの書体の変化については、2回目の講義の中で説明を予定しておりますので、参考にして頂ければと思います。

Q 3 資料の5ページにある「嘉祥喰」の読み方を教えてください。

A 3 : 「喰」は、国字（日本が独自に作った漢字）で、読みは国字のため音読みはなく、訓読みのための「く(う)／く(らう)」です。意味も常用漢字の「食」と同じで「物を食べる」と理解して良いと思います。

ご質問の「嘉祥喰」は、「かしょうぐい」と読むと思いましたが、念のため、手元にある辞典で調べると、「かじょうぐい」となっていました。

また、「嘉祥」の語も「かしょう／かじょう」と2つの読みがあることが解りました。

この結果、問題は「嘉祥」の読みにまで発展したため、併せて、「嘉祥喰」の由来を調べたところ、諸説あるようですが、一説では、室町時代においては、和菓子の日（6月16日）に「嘉定通寶／かぢやうつうほう」という宋（中国）の銭で買った菓子でもてなしたことに由来するということも知ることができました。

質問を頂いたおかげで私も勉強になりました。ありがとうございました。

Q4 「善いお年を」の「善」と「良」の違いを教えてください。

A4：正しくは「良いお年を」です。時間がなく詳しく説明できず、混乱を招いたことをお許しく下さい。

実は、認知症予防、生涯学習のために、この講座を契機に、来年に向け「最善を尽くして」欲しいとの願いを込めて、あえて使わせて頂きました。

「最善」は「できるかぎりの中で一番よいこと」、「最良」は「内容や質などが一番よいこと」の違いがあります。

また、字の成り立ちでは、「善」は、羊を犠牲にして神の前で誓約し、異常が生じた方が敗訴するという裁判で決めたことが始まりとし、このため、道徳的に正しいというのが始まりとする説があります。







なお、善の字形の上部は羊で、古代中国では、神への供え物として、神の意に沿う、うまいものの代表とされ、よい結果が得られるという観念があったようです。これが関係しているかは不明ですが、辞書によっては善に「めでたい。立派な。すぐれている。みごとに」の意もあるとしています。

「良」の古代文字は、穀物の出来の良し悪しをはかる器の形をしており、「内容の良い」とする意味が始まりとされています。

以上のようなことから、「善」の字を使いました。説明不足でした。

Q5 「幸」は「辛」がつきぬけて「幸」になると思っているのですが、何か関連はありますか？ また、なぜ、こういう漢字になったのかの解説を簡単に教えていただけると嬉しいです。

A5：漢字の成り立ちには諸説ありますが、「幸・辛」の古代文字は同時期に別字で作られ、以下の説でも、お示しのような関連はないように思われます。

(左から古い順)	こうこつ もじ 甲骨文字	⇒	きんぶん 金文	⇒	てんぶん 篆文
幸					
辛					

【^{きよしん}許慎（説文解字の著者）】

幸：吉であって凶から^{まぬが}免れる。

辛：金属の強さ。味の^{から}辛い。辛さは苦痛に感じて涙が出る。

【^{しずか}白川 静（文字学者）】

幸：両手にはめる刑罰の手枷の形。手枷だけの刑罰ですむのは^{ぎょうこう}僥倖（思いがけない幸せ）で重い刑から免れるので幸というのであろう。

辛：把手のついた大きな針の形。入れ墨をするときに使用する。

【藤堂明保（文字学者）】

幸：もと手かせの意。手かせの危険をのがれたこと。

辛：鋭い刃物。刃物で刺すこと。転じて刺すような痛い感じ。

【補足】今と、漢字ができたときでは、意味が大きく変わったものもあります。私の名前の「西^西」も、元は「鳥の巢」であり、のちに方位の西の意味に転用して使われるようになったものです。

Q6 GHQ（漢字廃止論）から漢字を守ってくれた話を詳しく知りたいと思
いました。

A6：概ね以下のようなエピソードがあったようです。

○1948年「日本語は漢字が多いため覚えるのが難しい。また識字率が上がり
にくく民主化を遅らせている」との偏見から、GHQの発案で日本語をロ
ーマ字表記にしようとしたようです。

○識字率調査のため、言語学者の柴田武に指示し、全国調査を実施。

○その結果、識字率は97.9%となった。

○GHQから「識字率が高いと困る」と遠回しに言われたようだが、柴田は
「結果は曲げられない」と突っぱねたようです。

○この結果、日本語のローマ字表記は撤回された。

○問題を作成した国語学者たちは、平均点上がるよう、難しく見えるがや
さしい問題を出したとも語ったとのことでした。

○また、「漢字は日本の文化そのもの」と説得したとも。

Q7 新井白石の「吉見里」という漢詩はどんなのですか？

A7：申し訳ございません。結論は解りませんでした。

しかしながら、田尻町公民館の館長さんに図書室の所収について、お尋ねしたところ、新井白石の漢詩の所収はなく、また、「田尻町史」にも「吉見里」の内容までの記述はないとのことでした。しかしながら、ご親切にも、「吉見里」が載っているのは、「八居題詠附録」享保6（1721）年刊、「日本詩選」江村北海編安永8（1779）年刊と教えて頂きました。

この情報を頼りに調べたところ、「日本詩選」は大阪府立中之島図書館に、寛永6（1794）年出版の10巻が蔵書されていることが解りました。

ただ、この書の中から「吉見里」が記載されている箇所を見つけ、その意味を理解するには、相応の知識と労力、時間を要すると思われるため、冒頭の解答とさせて頂きました。ご理解をお願いします。

その他

○「部首が難しかったです。もう少しゆったり進んで欲しいです」

⇒次回は、時間配分に気をつけてお話しできるよう心掛けます。

○併せて「楽しかったです」「ためになる楽しいお話しでした」の感想も頂きました。⇒こちらこそ参加頂きうれしいです。